

# Wildlife of the Mongolian steppe

八丈町立富士中学校 松岡 永

## 1. プロジェクトについて

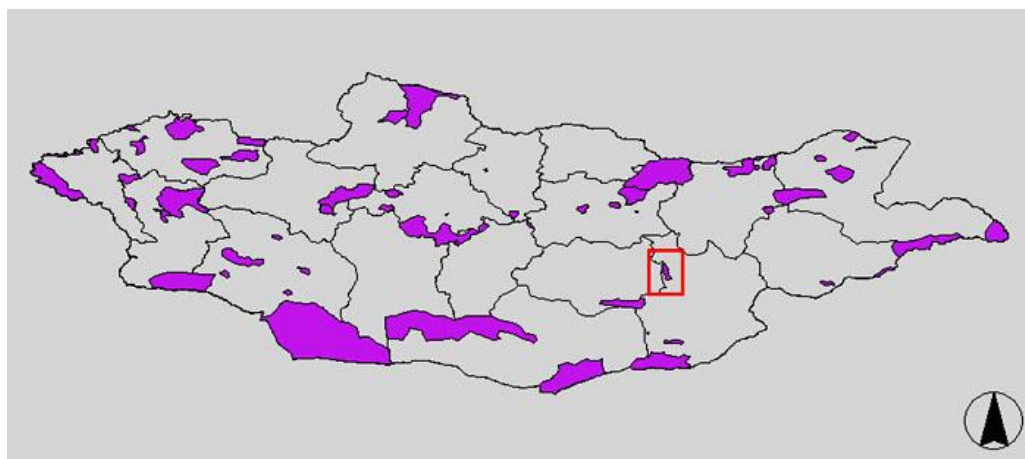
期間 : 2013年8月4日～17日 チーム4

調査地 : モンゴル イフナルティーン自然保護区

Ikh Nart Nature Reserve, Ikh Narti in Chuluun Region,  
Dalanjargalan Soum, Dornogobi Aimag, Mongolia  
(通称 Ikh Nart)



調査目的 : 草地の乾燥したステップからなる面積 66,600 ヘクタールのイフ・ナルティーンは、モンゴル国内の動物種が多く生息する自然保護区である。しかしこの保護区内においても動物たちは密漁や過度な放牧などの脅威に直面している。保護区内に生息する様々な生物のデータを集め、それぞれの種をもっと理解し、種同士や生息環境との相関関係が解明することで、将来これらの種により良い保護計画を立案することを目的としている。現在の調査の大半は異なる生物種がどのように資源を利用し、互いに影響し合っているかということの解明に焦点を絞っている。例えばアルガリとアイベックスはどのように共存しているのか、2種類のハリネズミはどのように資源を分け合っているのかなどについてである。すでにこの調査結果は多くの種の保護と生息環境の保全に役立ってきている。



モンゴル国内には多くの保護区があり、上の紫の部分がその場所を示している。今回の調査地 Ikh Nart は赤で囲まれた部分で、比較的小さい保護区である。保護区に入るために料金は必要なく、観光客用のツアーキャンプもある。

## 2. プロジェクトの参加まで

### ① 応募動機

このフェローシップの存在については2年前から知っており、活動内容にも非常に興味を持っていたが、生物が専門であるわけでもなく、野生生物について何か知識があるわけでもなかったため応募することをためらっていた。しかし研究者、世界各国から集まるボランティアと共に活動することに大きな魅力を感じどうしても加わってみたいと思い、応募を決意した。

### ② 準備について

#### 持ち物

ブリーフィングに書いてあるものはとりあえず用意しようと思ったが、登山やキャンプ経験が全くなかったため、買わなくてはいけないものが膨大な数にのぼった。そのため友人から借りることができるものは貸してもらいそれ以外のものを買揃えた。

#### 予防接種

お医者さんに相談したところ、破傷風は接種したほうがよいとのこと。それ以外は「病気は体力勝負。あなたは若いから大丈夫。」というお医者さんの言葉を信じて受けないことに。少し不安を感じたが出発までに体力をつけ、健康な体を維持しようと思決意した。

#### 体力

体力をつけようと思決意したものの、結局何もせず出発を迎える。しかし長い距離を歩くことや岩を登ることは嫌いではなかったことが幸いし、現地で困ることはなかった。ただ参加してみて感じたこととしては、体力があればあるほどこしたことはないということである。

#### 飛行機

7月に入ってから航空券を探し始めたため、直行便はすでになく値段も安いものは残っていなかった。大後悔。急いで北京経由の便を予約した。行くことが決まったら早めに航空券を探すことをお勧めします。

#### その他

集合の2日前に行き、ウランバートル市内を観光しようと思っていたため集合場所と同じ ZAYA Hostel に連絡を取り、2泊することにした。また空港からの送迎も同時にお願した。

## 3. 現地で

8月2日（金）日本出発

8月3日（土）ウランバートル市内観光

8月4日（日）ランデブー

18時に ZAYA Hostel で待ち合わせ。集合時間の前に2人のボランティア、Cathy と Lisa と知り合い、おしゃべりをしながら待つことに。18時になっても全員が揃わず30分後に無事メンバーがそろった。その場で軽く自己紹介をしたあと、調査の概要について説明を受ける。その後中華料理の店に移動し夕食を食べた。

### 【ボランティアメンバー】

#### ・ Lisa (オーストラリア)

オーストラリアナショナルバンクに勤める銀行員。アースウォッチのことを前から知っていて、ずっとボランティアに参加したかったという。

#### ・ Cathy (アメリカ)

毎年旦那さんを置いて世界各国を旅行しているらしい。このプロジェクトの参加は旦那さんの薦めだという。9月にはイタリアに旅行に行くと言っていた。常に明るくお茶目な言動と行動で2週間たくさん笑わせてもらった。

#### ・ Barnaby (イギリス)

ボランティア唯一の男性。ケンブリッジ大学の学生で専攻は生物と動物学。大学の奨学金の制度を利用して参加したとのこと。

#### ・ 磯尾智子さん

もう一人の日本人参加者で長野県の小学校の先生。どんな相手ともコミュニケーションをとることができる方で、モンゴル滞在中色々なお話を聞けてとても勉強になった。

### 【モンゴル人研究者】

#### ・ Selenge

このモンゴルのプロジェクトチーム1から6までのすべてに帯同する。英語のほかドイツ語も堪能。キャンプにおいては学生たちのお母さんの存在でもあった。

#### ・ Onoloo

Lesser kestrel が専門。別の仕事の関係でプロジェクトの途中でウランバートルに帰ってしまったがボランティアのことを色々と気にかけてくれた。

### 【デンバー動物園】

#### ・ Dave

Denver Zoological Foundation の獣医。今回のプロジェクトでの中心的な研究者で主にわしの調査を行う。日々真面目な顔でジョークを連発していた。

#### ・ Kevin

獣医であり、コメディアンでもある。Animal Planet の Emergency Vets にも出演していた。モンゴルではヘビとトカゲの調査を行う。

### 8月5日 (月)

あいにくの雨。今年のモンゴルは例年になく雨が多く、気温も低いという。ウランバートル市内は20℃に届かない日が続いていた。大きな荷物を朝のうちに用意された車に積み込む。ドライバーが直接キャンプまで運んでくれるという。午前中はモンゴル国立歴史博物館へ。ガイドの説明でゆっくりと館内を回る。古代から現代までのモンゴルの歴史について順を追って学ぶことができた。Kevin は前日にパスポートを失くしたらしく、Onoloo と2人でアメリカ大使館へ。博物館見学後、昼食をとり、Zaya に戻る。4:30 出発の電車に乗るため、3:30 頃

Zaya を出発し駅まで歩いていく。発車直前の駅は非常に混雑していた。ウランバートルを出発してしばらくすると見渡す限り草原の光景が続く。車内では Onoloo による Lesser Kestrel のプレゼンがあった。19:00頃車内でサンドイッチとフルーツの簡単な夕食をとる。23:00の到着までおしゃべりをしたりうたた寝をしたりと自由に過ごす。電車を降りると外は真っ暗で何も見えず。この日は駅近くの宿に宿泊する。



車内での夕食



二段ベットの上から



ウランバートル駅



車窓からの眺め



列車

8月6日（火）

宿を7:30頃出発しキャンプに向かう。だんだんと舗装されていない道に入っていく、激しく揺られながら2時間ほどでキャンプに到着した。到着後、荷物を置いてからキャンプにいる全員で朝食をとる。その後モンゴル人の学生やドライバー、キャンプマネージャーを含めた全員で自己紹介を行う。自己紹介の後にはキャンプの説明、調査について、調査器具についての説明があった。昼食後初めての調査でハリネズミを探しに行く。(調査その①)



キャンプの入口



この日は、発信器を取り付けたハリネズミを探しに行ったが、見つけたハリネズミは死んでいた。トムによると狐に襲われたのではないかと。この日は発信器を回収してキャンプに戻った。

トムに無線のテレメタリーの使い方を教えてもらう。



死んでしまっていたハリネズミ

ハリネズミについている発信器の音を探す無線テレメタリ。目標物が近づくと音が大きくなる。



### 調査その①【 Hedgehog ハリネズミ 】

研究者 : Sodnomphil Batdorj (通称トム) モンゴル人研究者

Altangerel Dondog (通称アギ) モンゴル国立大学の修士課程の学生

Ikh Nart には、2種類のハリネズミが生息している。日中ハリネズミは岩の下や木の根元でじっとして、夜になると活動を始める。その生態を探るため、発信器を取り付け、行動範囲などを観察している。ハリネズミが活動するのは夜のため、観察も赤外線スコープを使い夜行。ハリネズミの行動を一晩中レコーダーに録音するという。夜の調査には同行しなかったが、アギは毎晩観察にでかけていた。アギの観察により、ハリネズミは一晩に100匹もの虫を食べることがわかったという。8月6日は発信器を取り付けたハリネズミを探しに行き、8月7日は発信器を取り付けるためのハリネズミを探しに行った。どちらの調査での残念ながら見つけることはできなかったが、滞在中にトムとアギが見つけたハリネズミに発信器を取り付けるところをみる事ができた。

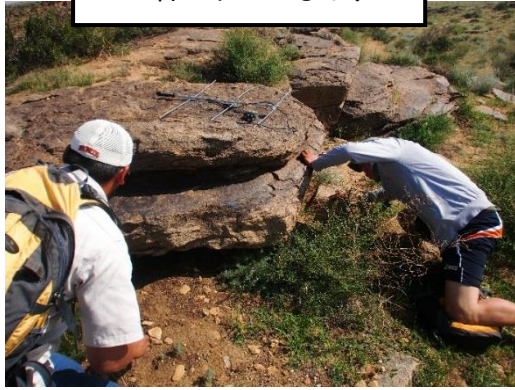
8月7日 (水)

5時30分起床。6時に前日仕掛けた小動物のトラップをチェックしに行く。(調査その②) 100個しかけたうち、5個に小動物が引っかかっていた。8時に朝食を食べた後は再びハリネズミを探しに行く。ボランティアがその日に何をするかは前日の夕食の時に決めることが多い。何をしたいかを聞かれ各ボランティアが選ぶ。研究者や学生の都合によってその日行う調査が異なり、毎日5人のボランティアが2~3の調査に分かれて同行した。

この日は見渡す限り草原の大地でハリネズミを求めて歩き続けた。岩の間、木の根元を確かめながら歩き続けること約1時間以上。5人が数百メートルずつ横に離れてそれぞれがまっすぐに歩き続ける。自分ではまっすぐに歩いているつもりでもそれを確かめる方法はなく、時々人影が見えなくなり不安になる。この日新しいハリネズミを見つけることはできなかったが、発信器をとりつけたハリネズミが岩の下にいることがわかる。何とか手を伸ばしてつかまえようとするも届かず断念。休憩できる岩場を探してひと休み。



この岩の下にはいるはず…



みんなで休憩タイム



一度キャンプに戻った後夕方から再び小型哺乳類の仕掛けを作りに行きその帰りにトカゲを探しに行く。捕まえたトカゲは体長や体重などを計測した、サルモネラ菌を持っていないか調べた後逃がした。この日初めてサンシャワーを浴びる。

## 調査その②【 Small mammals 小型哺乳類】

研究者 : Altangerel Dondog (通称アギ) モンゴル国立大学の修士課程の学生

Ankhubayar Lhagvasuren (通称アンカ) モンゴル国立大学の学生

Ikh Nart に住む小型哺乳類を捕獲し、観察する。前日の夕方に10×10合計100個の仕掛けを置き、翌朝にチェックしに行く。仕掛けの中には、ピーナツバターでおいをつけた粟を入れておびき寄せる。仕掛けにかかる小動物は多い日で12匹、少ない日だと0という日もあった。捕まえた小動物1匹ごとに、体重、尾の長さ、全長、足の大きさ等を測定し、初めて捕獲するものには耳にタグをつけて逃がす作業を繰り返す。数日おきに仕掛けをする場所を変え、どの場所でどの種が多く生息しているのかを調べている。



中に入る振動で入口が閉まる仕掛けとなっている。  
M. hamster や D.hamster、  
M.gerbil など数種類の小型哺乳類が生息している。



凍えたハムスターを温める Barney



耳にタグをつける様子



計測中

## キャンプでの生活

### <泊まる場所>

キャンプではモンゴルの伝統的な移動式住居ゲルに泊まる。キャンプ内には全部で7つのゲルがあり、女性用、男性用、キッチン用、ダイニング用などと用途が分かれていた。



### <食事>

モンゴル人の食事担当の人が毎食作ってくれた。朝は甘いおかゆとスクランブルエッグなどの簡単なもの。昼は自分でサンドイッチやスナックを持っていく。夕食はサラダとワンプレートディッシュのような感じだった。限られた調理器具や材料



で飽きることはないように工夫されたおいしい食事はキャンプでの楽しみの1つだった。食事は食事用のゲルに全員が集まって食べる。

パン（鍋で焼いていた）や飲み物はセルフサービスで自由にとる。たまに食器洗いを手伝ったりもした。



### <水>

水は近くにある湧水をくんでくる。飲むためには各ゲルにある濾過する袋を通してから使用する。少し独特の風味はするが水道のないキャンプでは貴重な水である。湧水がヤギの大群に占領された後数日は少しにおいが気になったりもしたが…。



### <サンシャワー>

シャワーは袋に入れた水を、太陽の熱で温め上からつるしてシャワーのように使う、その名も「サンシャワー」がある。何とエコなものだろうと感激した。1日の汚れを落とせる嬉しい時間だ。最初は途中で水がなくなりそうで使いながらヒヤヒヤしたがだんだんと慣れてきた。水が温かい夕方までに入るようにしていた。



### <トイレ>

トイレなどないと思っていたが、キャンプには立派なトイレがある。ただしもちろん水洗などではない。使い終わったあとに馬の糞をかぶせることで、土にかえるような仕組みとなっていて、サンシャワー同様こちらも非常に自然に優しい。



### <その他キャンプの様子>



洗濯したものはゲルの上でへ…



キャンプでの朝焼け



ソーラーパネルで発電している  
←ある日のキャンプ。ここは谷の間に作られている。



調査に必要なものをしまう倉庫

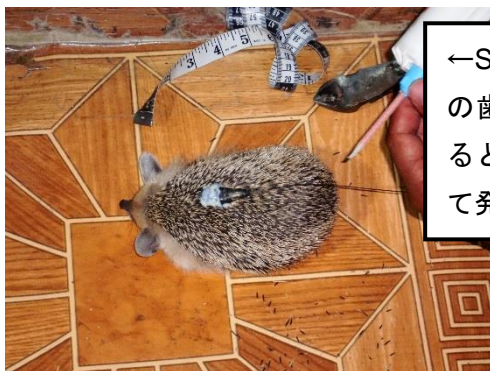


8月8日(木)

5時30分起床。小型哺乳類のチェックに行く。この日は12匹捕まえることができた。朝食後、アルガリの調査にでかける。(調査その③) 発信器をつけたアルガリを求めて歩き続ける。アルガリは非常に警戒心が強いため、こちらの姿を見るとすぐに逃げ出してしまふ。この日は400m～600mほどまでしか近づくことができなかつたが5時間ほどあるいた中で10匹のアルガリを観察することができた。

夕方から小型哺乳類の仕掛けを作りに行ったあと、トカゲの捕獲に行く。夕食後はトムとアギが見つけたハリネズミに発信器を取り付ける作業をみる事ができた。その後トムによる Ikh Nart に生息するハリネズミについてのプレゼンがあった。そして夜の9時30分から、コウモリのプロジェクトに参加した。(調査その④) ヘッドライトを頼りに深夜ゲルに戻り就寝。

ハリネズミに発信器をとりつける様子



←Super Glue という人の歯の治療にも使われるという接着剤を使って発信器をとりつける。

ハリネズミを手に取り嬉しそうな Cathy →



### 調査その③【 Argali アルガリ 】

研究者 : Dandar Baatar Dandar 地元のレンジャー

アルガリは絶滅が危ぶまれている羊の一種である。今回のプロジェクトでは発信器をつけたアルガリの調査を行った。発信器をつけた個体の一つ一つには名前がついている。その日に探す個体を決め、無線テレメタリーを頼りに歩いて探しに行く。見つけた場合、その位置や群れの様子などを観察する。9月には、新たに発信器をつけるアルガリを捕獲するプロジェクトが行われるという。今回は主に Dandar が一人で探しに行くことが多かった。



この日から Barney は一人で無線テレメタリーと GPS を使い調査に出かけるようになった。



遠くに見えるアルガリ

アルガリはこちらの姿を見るなり走って行ってしまい写真を撮ることがとにかく難しかった。

#### 調査その④ 【 Bat コウモリ 】

研究者 : Munkhtur Byamba (通称 ビャンバ) モンゴル教育大学の学生

コウモリの調査は夜行われる。水たまりの上に網をしかけ、網にかかるのを暗い中待つ。コウモリは網が見えずに突進してくる。捕獲したコウモリの種類、体長、体重、寄生虫の有無等を観察したあと、油性ペンで羽に番号を書き、逃がす。多い日で10匹以上捕まえることができた。この調査でどのような種類が Ikh Nart に生息しているかを調べるのが目的だという。暗闇での作業のためヘッドライトがないと作業ができないが、つけるとたくさんの虫が顔に集まってきて大変だった。ビャンバになぜコウモリに興味を持ったか聞いてみたところ、研究をしている人が少なく、とてもおもしろそうな動物だと思ったからと言っていた。彼女にとって今回の調査は卒業論文の資料を集める大切なものだという。



8月9日 (金)

この日初めてクロハゲワシの調査に同行する。(調査その⑤) このプロジェクトは主にデンバー動物園の Dave と Kevin によってすすめられている。この2日目から韓国の研究者がキャンプに滞在していて、一緒に調査を行っていた。この日は事前に把握している巣のうち5か所に行き、5羽のわしを捕まえて観察、タグ付けを行った。そのうち、発信器をつけることができる大きさの3羽に韓国製の発信器を取り付けた。

午後は再びトカゲを探しに行く。このころには素手でトカゲを捕まえることができるようになった。Ikh Nart に何種類のトカゲが生息しているのかまだわかっていない。今回のプロジェクト中も新しい色のトカゲを何匹か見つけることができた。



サルモネラ菌の保有の有無を調べる

この夜、韓国人研究者の Dr. Lee による韓国でのクロハゲワシの調査についてプレゼンテーションが行われた。Dr. Lee はワシに取り付ける発信器のバッテリーを長持ちさせながら小型化することに挑戦しているという。

調査その⑤【 Vulture クロハゲワシ 】

研究者 : Dave Kenny

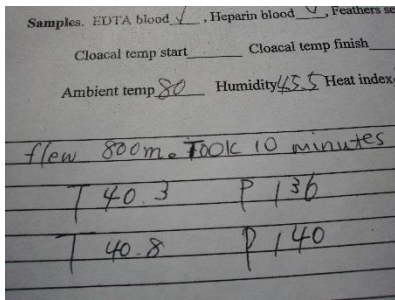
Kevin Fitzgerald

Onoloo Ganaa (通称 オンロー)

Chimidat Bat-erdene (通称 チムディー) モンゴル教育大学の  
学生他 韓国人研究者5名



事前に把握している巣の中から大人になる前の飛べない雛を捕まえる。巣は主に木の上と、岩の上の2か所に分かれる。捕まえた雛の体長・体重・羽の長さ・くちばしの長さなどを計測し、血液と羽のサンプルをとる。そして手首と羽にそれぞれシリアルナンバーのついたタグをとりつける。作業中はクロハゲワシが怖がることのないように頭にカバーをかけておく。最後に韓国人研究者たちが持ってきた発信器をとりつけた。これによりどこで冬を越し、どのようなルートで Ikh Nart に来るのが解明されることが期待されている。



ボランティアは計測した値をこのような紙に書き込む。



採血をする Kevin



Kevin と Dave



岩の上の巣



木の上の巣



岩の上で雛と一緒に



羽の長さを計測



シリアルナンバーのついたタグ



発信器を装着

朝は小型哺乳類のチェックに。午前中はトカゲとヘビを探しに行く。(調査その⑥) 今年、原因はわからないが例年になくヘビが少ないという。今回プロジェクト中、ヘビは1匹しか見つけることができなかった。去年の同じ時期には26匹捕まえることができたという。

調査その⑥ 【 Snakes and Rizard トカゲとヘビ 】

研究者 : Kevin Fitzgerald

Ankhubayar Lhagvasuren (通称アンカ) モンゴル国立大学の学生

Ikh Nart には数種類のヘビが生息している。大きく分けると毒を持つ毒ヘビとそうでないヘビに分けられる。ヘビを探すときは見つけてもまずは近寄らず知らせるようにと言われた。探している最中に毒ヘビに噛みつかれることも少なくないという。ヘビは昼間、岩の間などの日かげにすることが多



地道に歩いて探すしかない。大きなヘビには発信器を取り付けるその生態を観察する。今回は1匹のヘビに



この日は半日がオフということで午後は、遊牧民の結婚式にお邪魔した。車で10分ほど走ると遊牧民の家が。中では親戚の人が集まってお祝いをしている最中だった。新婚の2人のために飾り付けられたゲルの中には、新しい食器棚や冷蔵庫などが所狭し並んでいた。ヤギのミルクや乾燥させたヨーグルト、自家製のウォッカなどをごちそうになり、お礼に(?) 磯尾先生と日本語で上を向いて歩こうを歌った。



現代のゲルにソーラーパネルによる自家発電でテレビなど電化製品も使うことができる。



ボランティア・ドライバー・Selenge・遊牧民の子供たちと

この日の夕飯は羊肉のバーベキュー。石を入れた壺の中で野菜と共に焼いていく。骨つき肉にか

ぶりつく。全てがジューシーに仕上がっていて本当においしかった。



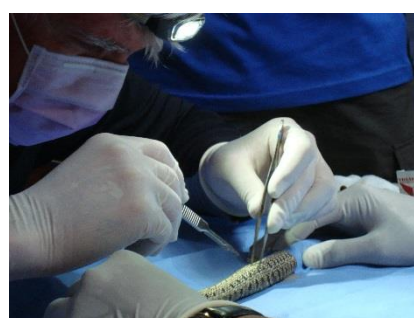
夕食後、ヘビの体内に発信器をとりつける手術が行われた。執刀医は Kevin、助手はアンカである。麻酔をかけるところから縫合までヘビを傷つけないように慎重に行う。



体内に入れる小さな発信器



手術前に位置を確認



ピンセットを使いながら

夜は学生たちとディスコに行ってみることに。暗闇の中車で走ること30分以上。明りのともる集落についた。どう見ても地方のカラオケ屋にしか見えなかったがディスコだという建物に入る。突然ワルツが流れ出したと思ったら老若男女次々踊りだすモンゴルの人々。状況が理解できないまま座っているとモンゴル人のおばちゃんに踊るわよと誘われフロアに引っ張り出され踊ることに。貴重な経験となった夜だった。

8月11日(日)

小型哺乳類のチェックは毎日の日課に。記録はボランティアで交代しながら行う。

午前中は初めて植物の観察に同行した。(調査その⑦)年齢が比較的近いオトマとビャンバの2人と調査しながら色々な話をした。好きな映画や恋愛について。あるいは家族のこと。地方出身の2人は大学の寮に住んでいること。地元に戻るためには車で何時間もかかること。将来はもっと勉強をして研究者になることが夢だという2人との話は楽しかった。休日はショッピングを楽しんだりするなど日本の学生と変わらない面もたくさんあった。モンゴルでは大学生に毎月わずかながら政府から奨学金が出るという。というのもモンゴルには1日数時間のアルバイトはできないらしく、学生ではアルバイトができないという。その分一生懸命勉強している印象を受けた。



## 調査その⑦ 【 Plants 植物 】

研究者 : Odmaa (通称 オトマ) モンゴル国立大学の学生

Ikh Nart に生えている植物の調査である。事前に決められたある地点 (Ikh Nart 内で何十か所もある) の 1 m 四方の区画の中の植物のデータを集める。その区画に生えている植物の種類やその植物の長さやバイオマスなどを調べていく。

GPS を頼りに調査地点まで歩いていき、格子状の枠を地面に当て、そこに生えている植物を一つ一つ調べていく。何気なく歩いていると見過ごしてしまいそうな植物もオトマとの調査の後には多様多様な植物であふれていることがわかる。基本的には背丈の低い植物しか生えていないが、その中できれいな花も多くみられる。オトマは見つけた植物を一つずつサンプルとして大学に持って帰るということで新聞紙につぎつぎと挟み込んでいた。歩いては座り込んで調査の繰り返しでわたしは半日でクタクタになってしまった。しかしオトマは本当に植物のことが好きで、ここ Ikh Nart での調査が楽しくてたまらないという。



短い草木しかない大地



ドライバーとオトマ



この中にある植物を観察



花もある

8月12日 (月)

当初の予定では、キャンプから遠い場所での調査のためこの日から1日テント泊の予定であったが、天気予報がよくないということで中止となってしまった。しかし遠い調査地に行くという事は変わらず、朝7時にキャンプを出発し、2時間かけて Ikh Nart の端のほうまでやってきた。そこで午前中はひたすらへびとトカゲを探す。トカゲはたくさん捕まえることができたが、へびは一向に見つからない。午前中はあきらめて昼食地へ。この日はクロハゲワシのグループと合流して外でピクニックのようであった。午後もしたすらへびを探したが収穫はなかった。



見渡す限り何も無い草原での昼食。なんと贅沢な時間！

この日の夕方からドイツ人研究者の一行がキャンプ地内でテントを張って泊まっていた。アンカによるとその中の1人は世界的にも有名な植物学者だという。

8月13日（火）

小型哺乳類のチェックに行ったが、この日の収穫はゼロ。朝食後は木にあるクロハゲワシの巣に向かった。どこまでの広がる草原の道なき道をしばらく進む。クロハゲワシの調査では基本的には飛ぶ前の雛を捕まえるのだが、この日の雛は2匹、あと少しのところ木の上から飛び立ち数百メートル走り去って行ってしまった。どうするのかとオロオロしていたところ、チムディーが走って追いかけた。クロハゲワシと人間の追いかっけこである。両方とも無事捕まえることができ、調査を行うことができた。どの調査についてもいえることだが、研究者、学生ともその動物（あるいは植物）に対して本当に丁寧に接している。当たり前のことだが動物も人間も植物も、自然の中では全て対等な存在なのだと再確認する毎日だ。



調査が終わったら巣の元の場所まで戻してあげる。この間親鳥が上で巡回して見ていることも…



行く手を阻む Dave と追いかけるチムディーのチームプレイ

この日はお昼に戻り午後のはんびりと過ごす。磯尾先生やチムディーとトランプをしたり、洗濯をしたり、昼寝をしたり…。コックさんがモンゴル伝統の乳酸菌飲料アイラックを飲ませてくれた。健康には良さそうだがとても酸っぱかった。夕飯に作るモンゴルの伝統料理（名前は忘れたがピロシキのようなもの）を作るところを見せてもらったりもした。



Selenge に教えてもらいながら挑戦する磯尾先生。油であげて完成。おいしくて3つ食べた。

8月14日（水）

この日小型哺乳類は2匹捕獲。午前中は数日前発信器を取り付けたヘビを探しに行く。無線テレメタリーを使い探すこと数分…発見した。発信器の調子もヘビの調子も問題なさそうである。再び逃がした後はまた新たに発信器を取りつけるためのヘビ探し。探しながらアンカ、Lisaと色々話した。東日本大震災について、福島原発のこと、日本の自殺率の高さについて、モンゴル人の中国に対する複雑な感情、オーストラリアでのアルバイト事情等々…。同じ事柄でも3つの国で比較してみると色々な共通点や相違点が見つかる。たくさん話す中で自分の国である日本のことを本当はあまり知らないのかもしれないと反省した日でもあった。夜は再びコウモリの調査に同行した。



8月15日（木）

いよいよ今日でキャンプともお別れである。朝最後の小型哺乳類のチェックに行く。この日は4匹の収穫があった。それ以外は風が強かったため調査は行わず、午前中はキャンプの裏をアースウォッチボランティア5人で散策した後は荷造りをして過ごす。午後2時頃、キャンプに残る Kevin、アンカ以外の学生とコックさんらは車でウランバートルへ。私たちは夜出発ということだったので午後はひたすらみんなでトランプやウノをして時間をつぶす。人が少なくなったキャンプは本当に寂しい。早めの夕飯を食べ、いよいよキャンプを出発。寝泊りをしたゲル、毎日使ったサンシャワー…短い間だったが本当に濃い時間を過ごしたこのキャンプに別れを告げ駅に向かう。深夜1時発の寝台列車に乗ってウランバートルへ。



キャンプで一緒に過ごしたメンバーと



真っ暗な駅のホームで1時間以上待つ…



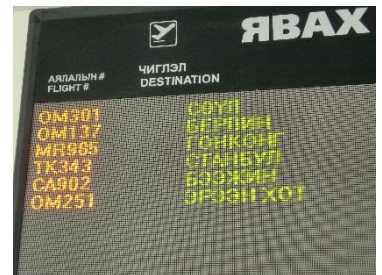
8月16日（金）

朝8時に列車はウランバートル駅に到着した。駅から Zaya へ移動。シャワーを浴びたかったがどうやらチェックイン時間前なので部屋もなく、シャワーも使えない様子。しかし Lisa と Cathy が交渉した結果、部屋を用意してもらえることに。朝食を食べ、シャワーを浴び、さっぱりとしたところで市内観光へ。チムディーの案内でボクトハーン宮殿博物館やモンゴル伝統の歌と踊りを見に行ったりした。夜は市内のレストランでキャンプのメンバーと再会。一緒に食事を取り1日ぶりのおしゃべりを楽しんだ。食事後はいよいよ本当のお別れ。お互いに連絡先を交換してレストランをあとにした。出口で Barney の「We made it!」という言葉と共にアースウォッチボランティア同士でハイタッチ。プロジェクトが本当に終わってしまったのだと実感した。



8月17日（土）

午前11時の飛行機に乗るため同じフライトの Lisa とチンギスハーン空港へ向かう。ウランバートルの中心地をタクシーで抜けるとすぐに舗装されていない道が続く。空港の近くは建設中の建物が数多くありまだまだ開発が途中という雰囲気。急激に発展が進んでいるこの国は数年後には大きく姿を変えるのだろうと感じた。そんなことを考えながら飛行機は離陸し北京へ。夕方には無事日本へ帰国した。



### <教育現場への還元>

私は中学校の英語教員で、動物や自然環境などについて特別な知識を持っているわけではない。そんな私が今回モンゴルに行き、そこで様々な動植物の調査に同行していく中で本当に多くのことを感じ、考えることができた。

もちろん1つめは自然環境についてである。動植物を含め身の回り全ての自然に敬意を払いながら調査していく研究者や学生を見て、当たり前だがこの地球というのは人間だけのものではなく人間・動物・植物などがお互いにバランスをとりながら共有しているものだということを再確認した。毎日水道から出る水を使い、スイッチ1つで電気をつけ…という生活をしているとなかなか感じることはないが、キャンプでの生活では日々「生きる」ということを実感していた。必死に生きようとする動物、水の少ない場所でもしっかり根を張って伸びていく植物、日の出とともに起床し、暗くなったら就寝する人間。そんな中にいられることがなんと贅沢で幸せなのだろうと感じた。そしてこのような環境、生態系を維持していくために、人間が自然のことをもっと理解するためにもキャンプで行われていた各調査が必要

なのである。それと同時に、日々の生活でも周りの自然環境にもう少し目を向ける努力をしなくてはならないと思った。

2つ目はモンゴル人の学生についてである。今回のプロジェクトでは多くの学生と一緒に調査を行い、話をする機会もたくさんあった。どの学生も自分の研究や自分の家族、そして自分の国モンゴルについて誇りを持っていることが言葉の端々からわかった。時に研究者以上の熱い情熱を持って調査に取り組む様子や自分の研究に対して真剣に取り組む姿を近くで見て、私自身がそのような姿勢を真似しなくてはならないと感じ、今自分が教えている生徒もいつかこのような熱い思いを持つ学生になってほしいと願わずにいられなかった。

最後は異文化体験についてである。キャンプにはモンゴル、日本、韓国、アメリカ、イギリス、オーストラリア、ドイツ…等々様々な文化を持った人が協力して調査を進め生活をしていた。自分の常識が常に相手にも通じるとは限らない。相手の態度や行動、考えに戸惑うこともあったし、自分の行動が相手を困らせていたこともあったかもしれない。そのような場面において「絶対正しい答え」というものは存在しないと感じた。自分が絶対ではなければ相手が正しいわけでもない。そんなときは、お互いの中にある違いを受け入れる姿勢を持ち、その違いを楽しめるようになりたいと思った。そして英語教員として、生徒に英語という言語の知識だけを教えるのではなく、異文化が交錯するこれからの国際社会で相手のことを受け入れることができる人になってもらえるよう努力していきたい。

#### <終わりに>

今回の非常に貴重で、夢のような体験をさせてもらえた機会を作っていただいた花王株式会社、アースウォッチジャパンのみなさんに心から感謝いたします。得られた経験を日々の教育活動で生徒に還元していくことができるよう仕事に励んでいきたいと思えます。本当にありがとうございました。